

萩原朔太郎ノート

## 「日本への回帰」をめぐって

山 本 哲 也

### 1

萩原朔太郎の晩年の文章を読んでまず気づくのは、文字づらの絶望的ポーズや自嘲とはうらはらなある種の「健康さ」である。

ここでいう晩年の文章とは、年代的に順に記せば、『絶望の逃走』（昭和十年）、『日本への回帰』（昭和十三年）、『帰郷者』（昭和十五年）、『小泉八雲の家庭生活』（昭和十六年）などを指している。そして昭和十七年に朔太郎は世を去っていることからすれば、これらの文章が朔太郎の思想的一面の到達点とみてもよいことになる。むろんそれはあくまで朔太郎の一面であり、これらの文章と時期的に前後する『郷愁の詩人と謝蕪村』や『与謝野鉄幹論』などがさらに重要な一面を形成するということは論をまたない。

この三冊の書と一篇の文章が与える「健康さ」は、それにしてもどこからくるのか。それは、おそらくこれらの文章が重なりあいながら、一貫して朔太郎の関心の中心となっている、日本あるいは日本的なものへの回帰の問題と密接にかかわっているはずである。さらにいえば、詩集『氷島』（昭和九年）の文語の採用によるいわゆる「後退」の問題と、この

回帰の問題はかわつてくるものである。

大岡信は「萩原朔太郎における∧日本回帰∨の問題は、それほど大きな問題ではない。なぜなら、彼には帰るべき日本の明確なイメージはなかったからである。」と明晰に述べている。<sup>(注1)</sup>この後半の「日本」なるもの、かんじんの帰るべき場のイメージがない、というのはなるほどその通りであろう。だが大岡信の文脈を逆にとつていえば、朔太郎に、帰るべき日本の明確なイメージがなかったところにこそ、「日本回帰」の問題の、問題があるのだともいえるのである。そしてまた、朔太郎に帰るべき「日本」の明確なイメージはなかったにしろ、かれじしんの永遠の夢のごとき「イニロイとしての日本」のイメージはあったのではないか、というのが、この小論の結論になるはずである。

まず『日本への回帰』から、朔太郎の回帰の内実がどのようなものであったかをみよう。

僕等は西洋的な知性を経て、日本的なものの探求に帰つて来た。なぜなら西洋的なインテリジェンスは、大衆的にも、文壇的にも、この国の風土に根づくことがなかったから。僕等は異端者として待遇され、エトランゼとして生活して来た。

こういう一節を読んでみえてくる朔太郎像とは、「異端者」、「エトランゼ」とみずから規定せざるを得なかった、いわば「過渡期」に位置した者の姿である。だがこの前段の、西洋的なものはこの国の風土に根づくことがなかったから、日本的なるものに帰ってきた、というかんじんの「日本回帰」はやはり単なるロジックにきこえてしまう。『絶望の逃走』のなかでは、「明治以来、すべての輸入した西洋思潮は、青年のエキゾチズムとダンディズムを満足さすほか、少しも根を持たない浮草の流行に過ぎなかった。流行の熱が醒めれば、人々は何時の間にか、再度また元の伝統的国粹思潮に帰って行く。」という部分がこれに対応するとみていいだろう。とすれば「日本的なるもの（の探求）」とは「伝統的国粹思

潮」ということになってしまいが、そして、このあたりのあいまいな用語法が、朔太郎の「日本への回帰」を、西洋的知性の挫折をいっきに国粹主義への帰属へと結びつけ、はなはだしい誤読のもとになっている点である。大岡信の指摘のように、回帰すべき「日本」のイメージはあいまいだが、さきの引用部分につづけて朔太郎が次のように書いているのを読むと、日本への回帰を語りながら、ついに「日本的なもの」の実体のなさ、その「空漠」を描いてみせるほかない朔太郎の孤独に、またしても出会うことになる。

しかも今、日本的なるものへの批判と関心を持つ多くの人は、不思議にも皆この「異端者」とエトランゼの一群なのだ。或る皮相な見解者は、この現象を目してインテリの敗北だと言ひ、僕らの戦ひにおける「卑怯な退却」だと宣言する。しかしながら僕等は、かつて一度も退却したことは無かったのだ。逆に僕等は、敵の重囲を突いて盲滅法に突進した。そしてやっと脱出に成功した時、虚無の空漠たる平野に出たのだ。今、此処には何物の影響もない。雲と空と、そして自分の地上の影と、飢えた孤独の心があるばかりだ。

西洋的知性の敗北と日本への回帰を語りながら、同時に、国粹主義への帰属の方向へもいかず、ただひたすら虚無や空漠や孤独を語る、この一点にこそ萩原朔太郎の「日本への回帰」の意味があるのだといえ、言いすぎであらうか。引用部分より少し後でも「現実は無無である。今日の日本には何物もない。一切の文化は喪失されてゐる」とくり返し朔太郎は強調せずにはおかないのである。

西洋的知性を経て日本的なものの方に回帰するまでの「巡歴の日は寒くて悲しかった」と朔太郎が述べる時、詩集『月に吠える』『青猫』における、その詩意識の突出した試みが、世の圧倒的な讃辞にもかかわらずその突出を受容し、深化させていく文学的土壌がどこにもなかったのだというめきをその行間に私たちは聴かなければならない。このこと

を、たんに朔太郎個人の資質の問題として、たとえば「自分が文壇から疎外されているという被害妄想」(河上徹太郎<sup>(註2)</sup>)などといってすますわけにはいかない。引用部分後半の、実体のない「空漠」感はいわば、西洋的知性の巡歴の時代からのものなのである。

「遠い遠い実在への涙ぐましいあこがれ」(『青猫』序)と朔太郎はいう。この「実在」は、朔太郎にとってあの回帰すべき「日本的なもの」の空漠とほとんど同じ位相にあるものだといえる。そもそも「実在」それじたいの存在が、なにはどかの具体的なイメージをもっていたわけではなかった。だから「あこがれ」はつねにあてどないあこがれそれじたいであつて、宙吊りにされた感情であるゆえに涙ぐましいものであつた。かれに明確にみえていたのは、そのような感情それじたいであり、あこがれの行き着くべき「実在」ではない。さきほどの引用中のことばでいえば、それは「虚無」にすぎなかつたから、感情はかれの内部をあてどなくめぐるよりなかつたのである。

……過去に僕等は知性人である故に孤独であり、西洋的である故にエトランゼだつた。そして今日、祖国への批判と関心を持つことから、一層また切実なジレンマに逢着して、二重に救ひがたく悩んでゐるのだ。孤独と寂寥とは、この国に生れた知性人の、永遠に避けがたい運命なのだ。

日本的なものへの回帰／それは僕等の詩人にとつて、よるべき魂の悲しい漂泊者の歌を意味するのだ。誰か軍隊の凱旋と共に、勇ましい進軍喇叭で歌はれようか。かの声を大きくして、僕等に国粹主義の号令をかけるものよ。暫く我が静かなる周囲を去れ。

これが朔太郎の「日本への回帰」と題された文章の内実である。「日本的なものへの回帰」とは、詩人朔太郎にとって「よるべき魂の悲しき漂泊者」の「歌」でしかなかった。大岡信が「日本回帰」の問題は、それほど大きな問題ではな

い、というとき、それはあくまで「論」として、日本回帰に関する文章を読んでいるといえる。だが、正確に言えば、その問題に関して朔太郎はいちどたりとも「論」に価する文章は書かなかった。「日本への回帰」を語りながら、帰るべき実体そのものの不明な文章は「論」ではない。帰るべきところが「空漠」たる「虚無の平野」でしかなかったがゆえに、それは、漂泊者の「歌」とならざるを得なかったのである。『日本への回帰』の続篇ともいうべき『帰郷者』の自序（その末尾）では朔太郎はこう書いている。

日本の文学者と知識人種。かつてはこの国の先覚者を自ら気負ひ、文化の尖端的指導者を以て任じた人人が、今日では反対に、自ら世紀の敗北者であり、最も無智な蒙昧人であることを自らよく意識して居るのである。それによつて彼等はいかゞの矜持を喪失し、懷疑にくれて彷徨しながら、老いた浦島のやうに漂泊して居る。悲しき帰郷者！我等はその行くべき所を知らず、泊るべき家を持たない。しかしながら「言葉」は、我々の胸に迫つて溢れ出してる。尚この寂しい著者をして、語るだけの言葉を語らしめよ。

さきに引用した「日本への回帰」と同巧異曲と云つていい文章である。西洋的知性の敗北↓漂泊↓帰郷、そして「帰郷者」の胸に迫り溢れ出ることば。それが「歌」でなくして何であろう。このような自序のもとに朔太郎は、横の文化と縦の文化という図式を使って日本のおかれている文明論的な、東西両文化の並存状況から論じはじめてはいるのだが、かれのそれらの文章における一貫した態度は、いまだ過渡期である状況を前にした「漂泊者」の嘆きであり、嘆きを「歌」うことでしかなかったのである。時に、空虚にも朔太郎は「最も絶望的に失望しながら、しかも尚前進への意を捨てないのだ」（「日本への回帰」と、なにものかへの「前進」を自己に課そうとする。だが、そのような意志すら「虚無」のうちに組み入れられた。そうしてその「虚無」の真ん中から「歌」が生まれる。「歌」とひきかえにいつにあいまいなまま捨

て置かれたのは、「日本」の内実、帰るべき場の実体（化）ということであった。

朔太郎のこれらの文章から受けたあの「健康さ」という印象も、実は、このあたりから来ているといっていだろう。「日本への回帰」がついに「論」となりえず、「歌」でありつづけた、という「健康さ」。というのは、朔太郎においては不可能とも失敗ともいうべき「日本への回帰」が、かんじんの「日本」の非実体化ゆえに、昭和十年代のわが国の思想的レベルでは実効性をもたなかったからである。だから、結果としては、易々と国粹主義なる「日本回帰」に組み入れられることが、回避できたのだといえるのである。

## 2

それにしても、そもその出発点たる「西洋崇拜」「西洋的な知性の巡歴」は、朔太郎にとってどのようなものだったのか。このことを考えるには、当然、詩語としての日本語の問題、すなわち口語詩から『氷島』の文語詩へと「後退」せざるをえなかった詩表現における回帰の問題がある。あるいは西欧的な「自我」の問題もあろう。だがここでは萩原朔太郎じしんの生活のレベル、「家庭」の問題にしばって考えてみたい。

……そこで自分の妻たちが、他の異性の手に抱かれ、他人の若い妻たちがまた自分の手に抱かれて居る。電燈の下には花が飾られ、香料の匂ひは艶めかしく漂つて居る。音楽と、そして靴ずれの中の甘い密語ノ嫉妬は必ず起こるであらう。しかも紳士の教養によつて調節された、つつましかの軽い嫉妬が、  
これからして西洋人は、常にその家庭を若返らせ、いつも台所の中で燻ぼつて居る妻たちをして、明るい新婚の夜に回復させる。

アフォリズム集『虚妄の正義』（昭和四年）所収の「蜂巣電燈の下での思想」の一節である。西洋人の気どった男女の戯れのゲームが、詩人の「西洋崇拜」熱のかっこうの証左というのはあまりに通俗だろうか。青年朔太郎が前橋の自宅の物置を改造した西洋風書斎となれば、これはもう「西洋かぶれ」としか言いようがないだろう。室生犀星の文章（『詩人・萩原朔太郎』）によれば、緑のふちどりのカーテン、ギターその他の楽器類、紅茶やコニャックといった西洋風飲物の置かれた書斎。それは詩人の書斎であると同時に、朔太郎にあつてはその空間が「西洋」そのものの象徴であつた。その「西洋」の延長線上で、通俗とも稚氣ともいえるこのような夫婦のかたちを、かれは本気で夢想していたらしい。

もう一つだけ、生活のレベルにおける朔太郎の「西洋崇拜」熱の例をあげるなら、大正十五年十一月以降、三年余り生活の場とした東京馬込村の家での「妻君教育」にふれなければならない。近所に住む知人をよび集めて二階の一室で催されたというダンスパーティーなるもの、それは妻にハイカラになることを教育する場であつた。だが、皮肉にも「家庭」の崩壊はそこからはじまることになつたのである。妻稲子との離婚の翌年、友人犀星に書き送つた手紙の中で朔太郎はこう述懐している。「僕の前の妻に対しては、僕はハイカラになることを所望し、大にその方の趣味を教養してやつた所、彼女は僕の欲するキリスト教的ハイカラにならないで、アメリカ的モダンガールになつてしまつた。一寸モリエールの喜劇妻君教育を現代の型で行つたわけだね。何にしても大失敗だつた。呵呵」（昭和五年三月十二日付）。朔太郎が憧れた西洋的な生活、近代的な夫婦の關係が、このように自嘲的になるほかない無慘な結果となつてあらわれたのである。

ところで、詩集『氷島』（昭和九年）の中に、今まであまりとりあげられたことのない小さな一篇がある。題は「家庭」。

古き家の中に坐りて

互に黙しつゝ語り合へり。

「日本への回帰」をめぐる

仇敵に非ず

債鬼に非ず

「見よ、われは汝の妻

死ぬとも尚離れざるべし。」

眼は意地悪しく 復讐に燃え 憎々しげに 刺し貫ぬく。

古き家の中に坐りて

脱るべき術もあらじかし。

「西洋の図」を夢み、「だがその蜃気楼が幻滅した今、僕等の住むべき真の家郷は、世界の隅々を探し廻って、結局やはり祖国の日本より外にない。」（「日本への回帰」西洋かぶれの放蕩息子の子の帰還した「家庭」とは、おそらく朔太郎がそこに抑圧しか見出せなかった「脱るべき術」もなく、ただ嫌悪するしかない「祖国の日本」の、封建的土俗「古き家」ともいべきものであった。

詩集『氷島』が、「何所にも宿るべき家郷を持たない」「永遠の漂泊者」（自序）の、「結局、やはり」帰ってくるところはこしかない、という回帰への過程にある歌だとするならば、この「家庭」という一篇はやはり注目し得る。嫌悪や抑圧はあっても、抒情の原理ともいべきいわゆる花鳥風月とは無縁だからである。

したがって、朔太郎は自らを「漂泊者」として呪縛しつつ、生活レベルの「家庭」の人となることはなかったのである。「家庭（父の悲哀）」というタイトルのもとで、かれは次のようなアフォリズムを書いている。

今日の悲劇は、家庭といふ觀念だけがあつて、家庭といふ事実が廃滅したことである。（『絶望の逃走』）



だが、「父の悲哀」でなく「夫の悲哀」こそ書かれるべきでなかったか。朔太郎はここで「父」を仮装することによって、あの「家庭」を満たしている抑圧を解き放つのである。つづけて「十九世紀には、人妻のノラが家出し、二十世紀には、ノラの娘たちが家出する。家に一人残されるのは彼の孤独な父ばかりである」と述べ、かれじしんの体験にむかうことは論理の上で避けてしまう。

「アフォリズムにおいて、みるべきものは、その女性論と芸術論とである」と吉本隆明（『朔太郎の世界』）は言っているが、それは、いわゆる文明論・文化論とは比較にならぬほどの、現実の酷薄な体験がそこにあったからにほかならない。朔太郎はアフォリズムを「詩の別題的形式」といい、「論文で書いた日記」ともいつている。そこで仮構された思想がどのように痛切な現実的基盤をもつものであれ、アフォリズムの論理の上で、朔太郎は現実、つまり私的体験のもろもろの方向には行かず、ある一般性のうちに抽象化してしまう。家出したのは「ノラの娘たち」でなく、「一人残されてるのは……父」ではなかった。妻であり、夫たる朔太郎じしんである。にもかかわらず表現の上で現実を回避する。回避しなければ表現は表現として自立しえず、生活のレベルに頹落せざるをえないからである。そう考えていけば、朔太郎はどこにも行きつかず、じぶんを「漂泊者」という観念でとりあえずは呪縛しておくほかなかったということができる。

現実の崩壊——西洋への幻滅——そして回帰という名の「漂泊者」としての自己呪縛、その果てに萩原朔太郎が見出したのは何であつたか。それは、「小泉八雲の家庭生活」に描かれたところの「家庭」像であつた。この「家庭」像は、むしろん詩人が失つたものですらなかったが、「魂のイデーする桃源郷」としての「家庭」を、詩人朔太郎が最後の指標としたとき、「日本への回帰」は、はじめて回帰すべき像を見出したものではなかったか。この稿が書かれたのが、昭和十六年八月、そして翌十七年に朔太郎はこの世を去る。この伝記的事実を重視すれば、朔太郎の生涯の思想的終結点ということになるが、この文章はどこかそのような位相から孤立した印象を読む者に与えるところがある。その印象は、昭和十六年

の日本の情況、つまり日本が国家的規模で戦争へなだれこんでいこうとする時期に書かれたことを考え合せると、いっそうあざやかなものになる。

ところで、朔太郎は「小泉八雲」にいつ出会い、そこにどのような意味を読みとっていったのか。「小泉八雲全集」に触れたのは、昭和十二年である。雑誌「四季」（昭和十二年五月号）の「狼言」欄で、朔太郎は「近頃よんだ物の中で、小泉八雲全集と、林房雄の小説『壮年』が一番面白かった。両書共、何れ詳しい読後感を書きたいと思って居る」と書いている。そして「小泉八雲」の読後感は、時代の情況のうちで、あるいはそれまでの朔太郎の思想（史）のうちで孤独に、ひとつの夢の輪郭をかたどっていったのだった。

孤独というのは、あれほど懂れた「西洋」からはじき返された者の孤独であり、觀念としての「家庭」しかもつことの出来なかつた朔太郎の痛切なそれである。

何よりもまず朔太郎が小泉八雲に上に見出したのは「永遠の漂泊者」の姿であり、それは当然、みずからの昭和十年代の詩人像・生活者像と重ね合せられたものであった。「小泉八雲の家庭生活」の冒頭はこうである。

万葉集にある浦島の長歌を愛誦し、日夜低吟しながら逍遙して居たといふ小泉八雲は、まさしく彼自身が浦島の子であつた。希臘ギリシャイオニア列島の一つである地中海の一孤島に生れ、愛蘭土アイルランドで育ち、仏蘭西フランスに遊び米國に渡つて職を求め、西印度に巡遊し、遂に極東の日本に漂泊して、その数奇な一生を終つたヘルンは、魂のイデーする桃源境の夢を求めて、世界を当なくさまよひ歩いたボヘミアンであり、正に浦島の子と同じく、悲しき「永遠の漂泊者」であつた。

しかし、「漂泊者」八雲は「旧日本の婦道的美徳やさうした女に特有の淑やかさいちらしさ、愛らしさ」を備えた日本女性節子を妻にし、家庭を営み「家庭を樂園化すること」で心の抛り所をそこに求めたのである。

幼にして母を失ひ、他人の家に養はれ、貧困の中に育ち、飢餓と冷遇を忍びながら、職を求めて漂泊し、人の世の惨たる辛苦を嘗めつくして、しかも常に魂の充たされない孤独に寂しんでいたヘルンにとつて、日本は遂にそのハイマートでなかつたにしろ、すくなくともその妻に抱擁された家庭だけは、彼の最後に祝福された、唯一の楽しい安住の故郷であつた。おそらくヘルンはその時初めて心の隅に、幸福といふ物の佻しい実体を見たのであらう。

この文章で朔太郎があたう限り筆を尽しているのは、ヘルン（八雲）の子供のような純粹さと無邪気さであり、妻子への熱愛ぶりである。そして「家庭」像の核心ともいうべきイメージは、簡素な純日本風の生活様式のこまごまを背景に描出されている妻節子の像である。貞淑、献身、武士道的ストイシズム、礼節、といったことばをそこに駆使しながら「旧日本的な婦道」のさまを朔太郎は詳述している。

だが同時に、この「楽しい安住の故郷」である「家庭」が、ヘルンの「あきらめ」の上に成り立ったのだとする朔太郎の押えも見逃してはならない。「彼が帰化を決心し、日本の土となることを覚悟した時、言ひ知れぬ寂しさとやるせなさ、心の底にうづつき迫るのを感じたであらう。それが日本人の抒情的な言葉で、あきらめと呼ばれるものであることさへ、おそらくヘルンは知つたであらう。」

朔太郎は、自分自身のことに関して「あきらめ」ということばを使用するを許さなかった。「日本への回帰」において、虚無をこえて「新日本創設」という虚しい自己説得すらおこなっているほどである。あきらめということばを言つてしまえば、たとえば『氷島』の文語脈による思想的悪戦もいっきに途絶していかざるを得ないからである。だが、ヘルン小泉八雲が「あきらめ」の上に「幸福といふ物の佻しい実体」をみたように、朔太郎も、断念によつてしかこのような文章は書けなかつたはずである。『氷島』の荒寥たる風土を経て、「日本への回帰」の道筋をとりながら、どこにもいき着くこと

のない朔太郎の空漠と孤独と、けつして自らのものとなることはないという断念によって仮構されたのが、この「家庭」像であつたといえる。

仮構というのは、仮構するよりほか、もともと「家庭」というべきものが朔太郎にはなかつたからである。さらにいえば、朔太郎には「生活」すらなかつたといつていい。結婚後の東京での生活もその経済的基盤はほとんど前橋の実家からの仕送りで営まれており、昭和五年父密蔵の死後は母の管理する遺産が当てにできた。原稿料収入など煙草や酒といった小遣錢かせぎほどのものでしかなかつたという。そういう条件が生みだす生活者意識の欠如は、欠如それじたいによって仮構にむかわざるを得ないだろう。いわゆる「生活者」でないという意識が、逆に「生活」への関心を育てることになるのである。ただ朔太郎の場合、それは生活そのものでなく、生活という觀念だという点は留意する必要がある。たとえば、伊東静雄の「日本回帰」が、その詩においていわゆる花鳥風月にひき寄せられたことと同等の重さで、朔太郎は生活という觀念、觀念としての「家庭」にむかつたのである。だがそれは、保田与重郎風にいえば、イロニイとしての「家庭」にほかならなかつた。

「小泉八雲の家庭生活」の最終段落で、ヘルンが死の前日にみた「不思議な夢」のエピソードが出てくる。桜が返り咲きをして、数日を経てヘルンは病死するが、死の前日に妻節子に長い旅をした夢の話をする。そのあと朔太郎はこう書いている。

夢見ることによって生きた詩人等は、また夢見ることで死ぬのであつた。世界の国々を漂泊して、遂に心の郷愁を慰められなかつた旅人ヘルンは、最後にまたその夢の中で漂泊しながら、見知らぬ遠い国々を旅し歩いた。

回帰すべき「日本」がどこにもないという空漠がひろがればひろがるほど、朔太郎は仮構した「家庭」のなかで「妻節

子」を美化し、その「家庭」を美化すればするほど、それはけっして現実のものとはならないことをかれは痛いほど実感していたにちがいない。右の一節の、夢見ることに生きた者はまた夢見ることで死ぬ、とはいわば朔太郎の晩年における思想的モチーフの突出であり、断念であった。

『日本への回帰』、『帰郷者』で朔太郎の心を領したものが「目的地」でなく、あてどない空漠と孤独であったとすれば、政治とか国体とかいったレベルの情況論的な回帰は朔太郎にありうるはずがなかった。よかれ悪しかれ、それは詩人の「健康さ」というべきものだ。「小泉八雲の家庭生活」という文章は、詩人の夢のかたちをした、朔太郎の孤独な「日本回帰」ということになる。

注1 「近代日本詩人選10・萩原朔太郎」(筑摩書房・一九八一年刊)

注2 「萩原朔太郎——日本のアウトサイダー」(河出書房新社・文芸読本萩原朔太郎)より。

#### 参考文献

「萩原朔太郎全集十五卷」(筑摩書房)のうち、第一〇巻から『日本への回帰』、第十一巻から『帰郷者』「小泉八雲の家庭生活」、第四巻、第五巻のアフォリズム集など。